防衛大学校本科第２０期学生及び理工学研究科第１３期学生
卒業式における学校長式辞（昭和５１年３月２０日）

第3代学校長　猪木　正道

防衛大学校本科第２０期学生及び理工学研究科第１３期学生の卒業式を行うに当りまして、三木内閣総理大臣[注(1)]、前尾衆議院議長[注(2)]、河野参議院議長[注(3)]、坂田防衛庁長官[注(4)]をはじめ、内外から多数の来賓並びに父兄の御臨席をえましたことは、卒業生はもとより、防衛大学校にとりましても光栄の至りと存じます。来賓各位の御厚意と父兄の方々の御熱意とに対し、心から御礼申し上げる次第であります。

今回卒業の栄をになう本科学生は、本年４月から陸・海・空各自衛隊の幹部候補生学校に進み、幹部自衛官となるための教育を受けます。また研究科の卒業生は、陸・海・空の各部隊や防衛庁の各機関において、それぞれ重要な任務につくことになっています。

このおめでたい日に当り、私は、まず卒業生諸君の洋々たる前途を祝福し、本科並びに研究科の卒業生諸君が、今後、幹部自衛官として防衛の専門家として、ただ一筋の道をまっすぐに前進されるよう求めたいのであります。幹部自衛官は、高度の知識と技能とを必要とする専門職であります。およそ、すべての専門職の養成には長い年月を必要としますが、特に防衛の分野におきましては、精密誘導兵器の例を見ましても、世界各国は国運を賭して、新しい科学技術の開発に装備の刷新に、そしてまた戦略構想の検討に全力を尽しておりますから、少しでも油断をすれば、たちまち専門家としては落伍してしまいます。もし万一、諸君が将来、防衛の専門家として世界各国との競争に落伍するようなことがあれば、単に諸君が個人として失格するばかりではなく、日本国の安全が失われるおそれさえあります。

このことは、幹部自衛官が単なる一つの専門職ではなく、国家の安全保障に対して、究極的に責任を負うところの特別の専門職であることを意味します。多数の主権国家が

注(1)　三木武夫

注(2)　前尾繁三郎

注(3)　河野謙三

注(4)　坂田道太

併存しております今日の国際社会においては、それぞれの国家が自国の主権の及ぶ範囲内における平和と安全に責任を負うことは、自国の独立を守るために必要不可欠であるばかりでなく、世界の平和を維持するただ一つの有効な方法でもあります。この意味において、幹部自衛官という専門職は、日本国の防衛のみならず、国際社会の平和と安全に対しても、崇高なる義務を負っているといわなければなりません。諸君が防衛の専門家として幹部自衛官の道をひたむきに進むとき、幹部自衛官は、国家的にも、また全人類的にも、もっとも重大かつ高貴な使命を負っていることを常に銘記して、これを誇りとされたいのであります。

次に私は、卒業生諸君が防衛の専門家としての道に徹することの裏付けとして、職能倫理をしっかりと身につけることを要望いたします。

諸君は自衛隊の幹部として、将来、陸・海・空の各部隊を直接間接に運用する地位につくはずですが、防衛力はすなわち実力であります。この実力を操作運用する立場にある自衛隊の幹部は、防衛の専門家としての高度の倫理的責任感に貫かれているのでなければ、その重大な使命を遂行することはできません。日本国が防衛大学校卒業生諸君に期待するのは、防衛の専門家としての国際競争力と、これを裏付ける高度の職能倫理とであると、私は確信いたします。

防衛大学校の本科並びに研究科の卒業生諸君が、このような日本国の期待に十分応えることを期待して、私の式辞といたします。